バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌　Vol.28，No.1，pp.1－9（2026）
Copyrightⓒ2026 Biomedical Fuzzy Systems Association

[Original article]

（2026 年 7 月 23 日　Accepted）

看護系大学生の口腔ケア演習における羞恥心とその影響要因

中島　富有子[1]，原　やよい[2]，大川内　鉄二[1]，高野　佳範[1]，黒木　まどか[3]

1）西九州大学・看護学部
2）福岡看護大学・看護学部　3）福岡医療短期大学・歯科衛生学科

要約：本研究の目的は，看護系大学生の口腔ケア演習における羞恥心とその影響要因を明らかにすることである．探索的記述研究として，質問票調査を行った．看護系大学生 349 名のデータを分析した．その結果，本研究では，口腔ケアの演習時，口の中を見せることの羞恥心 78.2%，異性に口の中を見せる羞恥心 86.5%に増え，多くの学生が羞恥心を抱いていた．口腔ケアの演習を異性と組む羞恥心 90.8%と多く，口の中を異性に見せ羞恥心を抱く学生よりも多かった．影響要因として，進路選択に対する自己効力感が高い方が，「演習時に口を見せる羞恥心」が低くなる傾向にあった．また，1 年生より 4 年生の方が，異性に口の中を見せる羞恥心が低かった．男性の方が女性より演習時に異性と組む羞恥心が低くなっていたが，男女の数が異なり効果量も低く今後の検証が必要である．
キーワード：看護系大学生，口腔ケア演習，羞恥心，影響要因

Shame and Its Influencing Factors in Oral Care Training for Nursing Students

Fuyuko NAKASHIMA[1], Yayoi HARA[2], Tetsuji OKAWACHI[1], Yoshinori KOUNO[1], Madoka KUROKI[3]

1) Department of Nursing, Nishikyushu University
2) Department of Nursing, Fukuoka Nursing College
3) Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences

Abstract: *The purpose of this study was to clarify the feelings of embarrassment and their influencing factors among nursing students during oral care practice. As an exploratory descriptive study, we conducted a questionnaire survey and analyzed data from 349 nursing students. The results showed that 78.2% of students felt embarrassed about showing their mouths during oral care practice, and the percentage of people who feel embarrassed about showing the inside of their mouths to the opposite sex has risen to 86.5%, meaning many students experienced embarrassment. About 90.8% felt embarrassed about pairing with the opposite sex for oral care practice, which was even higher than the embarrassment of showing their mouths to the opposite sex. As for influencing factors, students with higher self-efficacy regarding career choices tended to feel less embarrassed about showing their mouths during practice. Additionally, 4th-year students were less embarrassed than 1st-year students about showing their mouths to the opposite sex. Men felt less embarrassed than women about pairing with the opposite sex during practice, but since the number of men and women was different and the effect size was small, further verification is needed.*
Keywords: *Nursing university students, oral care training, sense of embarrassment, influencing factors*

Fuyuko NAKASHIMA
176-27 Ogi, Ogi City Saga, 845-0001, Japan　Phone：＋81-952-37-0249
E-mail: nakashimafu@nisikyu-u.ac.jp

1. はじめに

口腔の健康は，食事から栄養を補給するといった身体的健康に影響し，会話で人と交流を持ち生活を楽しむなど精神的・社会的健康にも影響する[1]. そのため，口腔の健康を保つことは人が生きていく上で重要である．平成 23 年には，口腔の健康を保ち国民が健康で質の高い生活を営むために，「歯科口腔保健の推進に関わる法律」が公布されている[2]．また，診療報酬改定に関しても, 口腔の健康支援において, 平成 24 年以降, 周術期口腔機能管理の推進が図られ，手術後の合併症予防として診療報酬の加算ができるようになった[3] [4].

口腔の健康の重要性から，現在，超高齢社会となった日本において，加齢と関連が深いオーラルフレイルが問題となっている．オーラルフレイルは口腔の衰えであり，口腔機能の軽微な低下を示す可逆的状態である．口腔乾燥，咬みにくさ，食べこぼし，誤嚥，活舌の低下などの症状がある[5]．オーラルフレイルは，改善可能であり，そのための口腔ケアが必要である[6].

口腔の健康に向けた適切な口腔ケアは，オーラルフレイル予防とともに，歯喪失の二大原因であるう蝕や歯周病予防になる[1]．口腔ケアは口腔の健康維持に不可欠であり，口腔の清潔を保つ器質的口腔ケア，口腔の機能を維持・回復させる機能的口腔ケアがある[1]. 適切な口腔ケアは，口腔の健康だけでなく全身の健康につながることが研究で明らかになり，誤嚥性肺炎[7] [8]，心内膜炎[9]，糖尿病[1]などの疾患予防となる．そういった中で, 看護師は, オーラルフレイルへの対応, う蝕や歯周病予防とともに全身の健康問題を踏まえながら，日々の口腔ケアを行っている.

口腔ケアの重要性から看護基礎教育では，看護師に必要な口腔ケア技術の習得が必須である．看護系大学生（以下，学生）が，口腔ケアについて意欲的に学習し，看護師として患者の状態に適した口腔ケアができる教育が求められている[10]．看護基礎教育における口腔ケア演習は，口腔というデリケートゾーンをケアする技術習得と患者の心理状態を学ぶ目的がある[10]. 本研究では，口腔ケア演習において学生が患者役を経験し，患者の心理状態を学ぶ場合，羞恥心を抱くことが学習に影響すると考えた[11]．また，口腔ケア演習に影響を及ぼす要因として，学生生活や青年期の発達課題である進路選択について着目した．先行研究において，口腔の学習意欲と「進路選択に必要な行動がとれるという自信の自己効力感」が関連していたこと[12]から，口腔ケアの羞恥心に対する影響要因の可能性を考えた.

本研究では，学生の口腔ケア演習における羞恥心とその影響要因を明らかにして，効果的な教育の示唆を得たいと考えた．そのため，本研究の目的は，学生の口腔ケア演習における羞恥心とその影響要因を明らかにすることである. また, 先行研究[12] [13]をもとに「進路選択に対する自己効力感」は，「進路選択に必要な行動がとれる自信」と定義した.

2. 研究方法

2.1 研究対象者

研究対象は, 看護系大学 1〜4 年生の 405 名を対象にした. 研究対象者が経験した主な口腔ケア演習として, 1 年生は，6〜7 月の間に実施される 1 回の演習経験があった. 2 年生は, 1 年生の時に 6〜7 月と 10〜11 月の間に実施される 2 回の演習経験があった．3 年生は，1 年生 6〜7 月と 10〜11 月，2 年生 10〜11 月の間に実施される 3 回の演習経験があった．4 年生は，1 年生 6〜7 月と 10〜11 月，2 年生 10〜11 月，4 年生 5〜7 月の間に実施される 4 回の演習経験があった.

2.2 調査期間

2022 年 7 月〜2022 年 8 月

2.3 研究の概念図（図 1）

研究対象大学では，看護基礎教育に必要な口腔ケア演習として，口腔ケアの技術習得，デリケートゾーンである口腔のケアを受ける患者が持つ心理状態の学びを目標として教育した．口腔ケア演習は，口腔ケアを行う看護師役と患者役を学生が体験した．口腔ケア演習では，異性の患者対応を経験するため，男性と女性の混合グループの配置となっていた．女性の学生が多いため，女性だけのグループになる場合があった.

本研究では，心理状態の羞恥心に着目しその影響要因について, 探索的記述研究（質問票調査）を行った. 調査内容は，「口の中を見せる羞恥心」，「異性に口の中を見せる羞恥心」，「口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心」とした．先行研究[1]〜[14]などを参考に，影響要因として，基本属性，大学生活の状況，進路選択に必要な行動がとれる自信，学生が行う口腔のセルフケアとした.

2.4　データ収集方法

研究対象の学生に，研究協力依頼の説明書と調査票を配布し，倫理的配慮を含む研究について書面と口頭で説明した．調査票は，記入後に個人用の回収用封筒に入れ厳封してもらい，大学内に設置した回収ボックスへの投函を依頼した．

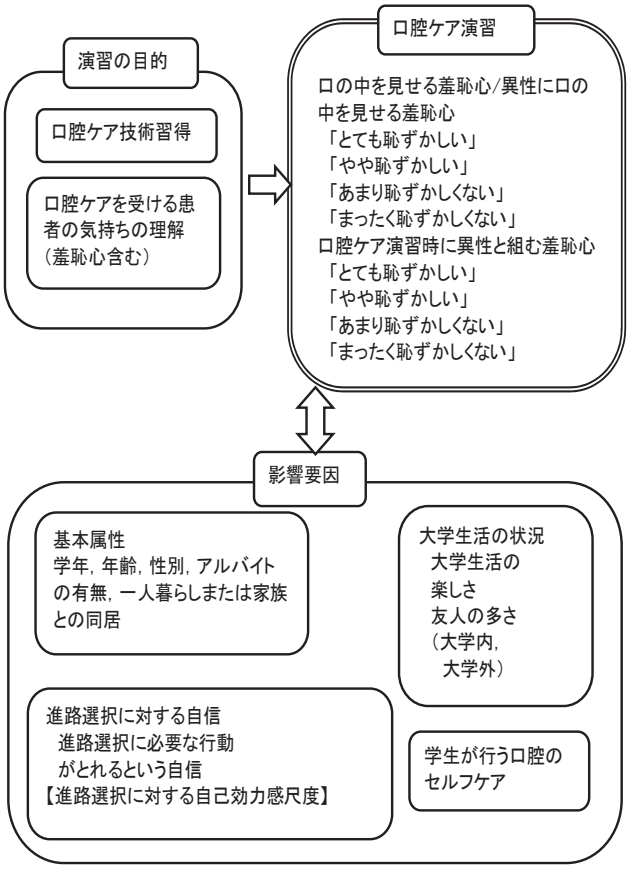


図1.研究概念図

2.5　調査項目

1）基本属性

学年，年齢，性別，アルバイトの有無，一人暮らしまたは家族との同居を調査項目として設定した．

2）大学生活の状況

大学生活の楽しさ，友人の多さ（大学内，大学外）を調査項目として設定した．

3）進路選択に必要な行動がとれる自信

進路選択に必要な行動がとれる自信について，浦上[13]によって開発された「進路選択に対する自己効力感尺度」を用いた．30 項目から構成されている．「非常に自信がある」4 点～「まったく自信がない」1 点の 4 件法で，30～120 点の範囲を設定している．信頼性，妥当性が確認され，得点が高いほど進路選択に対する自信があり自己効力感が高いと評価する．

4）学生が行う口腔のセルフケア

学生が行っている歯磨きの回数，歯ブラシ以外の使用としてフロス（糸ようじ）・歯間ブラシ・マウスウオッシュ・舌ブラシ，口腔の健康をメンテナンスする定期的な歯科受診を調査項目として設定した．

5）口腔ケア演習時の羞恥心

口腔ケアの演習時に，口の中を見せる羞恥心について，「とても恥ずかしい」4 点～「まったく恥ずかしくない」1 点を調査項目として設定した．異性に口の中を見せる羞恥心についても同様に，「とても恥ずかしい」4 点～「まったく恥ずかしくない」1 点を調査項目として設定した．

6）口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心

口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心については，「とても恥ずかしい」4 点～「まったく恥ずかしくない」1 点を調査項目として設定した．

2.6　データ分析方法

得られたデータを統計解析ソフト SPSS Version29.0J for Windows を用い，口腔ケア演習における羞恥心について分析した．Kolmogorov-Smirnov 検定や Q-Q プロットでデータの正規性を確認した．「進路選択に対する自己効力感尺度」のデータは，Kolmogorov-Smirnov 検定及び Q-Q プロットで正規性が確認できた（図 2）．

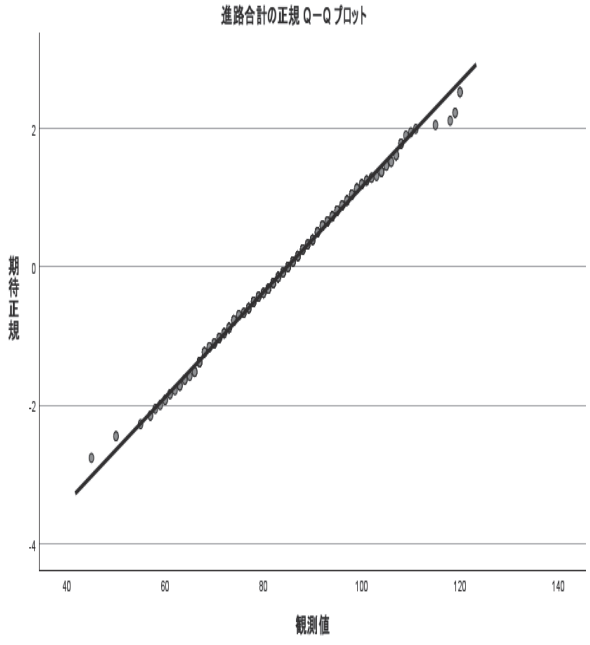


図 2.　「進路選択に対する自己効力感尺度」のデータ　Q-Q プロット

それ以外のデータは正規性が確認できなかったため，検定や相関はノンパラメトリック検定を行った．2 群間の比較に関してはMann-Whitney のU検定を行った．3 群間以上の比較は Kruskal-Wallis の検定を行い，その後の多重比較検定として Scheffe 法（順位に基づく Scheffe 型）を行った．2 群間の相関には，Spearman の順位相関係数の検定を行った． なお，本研究では，相関係数 rs が，以下の範囲である場合に相関関係を認めることにした．

$-1<rs<-0.2$　$p<0.05$

$0.2<rs<1$　$p<0.05$

2.7　倫理的配慮

研究対象である大学の承認後，研究対象者に研究の目的，方法，回答の任意性，プライバシーの保護，匿名性の保持，不利益はないこと，結果は学会などで公表するが個人が特定されないことなどを口頭及び文書で説明した．同意書の署名をもって同意を得た．調査票記入後，回収ボックスで回収した．尺度の使用については，開発者の許可を得た．本研究は福岡学園倫理審査委員会により許可を得て実施した（許可番号　第345 号）．

3.　結果

3.1　基本属性

405 名に質問票を配布し 352 名より回答を得た（回収率 86.9%）．有効回答 349 名（有効回答 86.2%）であった．男性 28 名（8.0%），女性 321 名（92.0%）で，平均年齢は 19.71±1.43 歳であった．1 年生 100 名（28.7%），2 年生 91 名（26.1%），3 年生 94 名（26.9%），4 年生 64 名（18.3%）であった（表 1）．アルバイトを行っている学生 257 名（73.6%），行っていない学生 92 名（26.4%）であり，一人暮らしの学生 98 名（28.1%），家族との同居の学生 251 名（71.9%）であった．

表1．学年毎の参加者

n ＝349

学年	人数（名）	割合（%）
1年生	100	28. 7
2年生	91	26. 1
3年生	94	26. 9
4年生	64	18. 3

3.2　大学生活の状況

大学生活の楽しさは，とても楽しい 80 名（22.9%）やや楽しい 138 名（39.5%），普通 109 名（31.2%），ややつまらない 7 名（4.9%），とてもつまらない 5 名（1.4%）であった．

大学内の友人の多さは，とても多い 20 名（5.7%），やや多い 59 名（16.9%），普通 223 名（63.9%），やや少ない学生 39 名（11.2%），とても少ない学生 8 名（2.3%）であった．大学外の友人の多さは，とても多い 28 名（8.0%），やや多い 89 名（25.5%），普通 202 名（57.9%），やや少ない 24 名（6.9%），とても少ない 6 名（1.7%）であった．

3.3　口腔に対するセルフケア

歯磨きの回数として，1 日 1 回が 16 名（4.6%），1 日 2 回が 254 名（72.8%），1 日 3 回が 71 名（20.3%），1 日 4 回が 7 名（2.0%），1 日 5 回以上が 1 名（0.3%）であった．フロス（糸ようじ）を使用している 80 名（22.9%），使用していない 269 名（77.1%）であった．歯間ブラシを使用している 106 名（30.4%），使用していない 243 名（69.6%）であった．マウスウオッシュを使用している 77 名（22.1%），使用していない 272 名（77.9%）であった．舌ブラシを使用している 68 名（19.5%），使用していない 281 名（80.5%）であった．口腔の健康をメンテナンスする定期的な歯科受診をしている 123 名（35.2%），受診していない 226 名（64.8%）であった．

3.4　口の中を見せる羞恥心（表 2）

口腔ケアの演習時に，口の中を見せる羞恥心については，「とても恥ずかしい」が 101 名（28.9%），「やや恥ずかしい」172 名（49.3%），「あまり恥ずかしくない」45 名（12.9%），「まったく恥ずかしくない」31 名（8.9%）であった．「とても恥ずかしい」と「やや恥ずかしい」を合わせると 273 名（78.2%）が，恥ずかしい思いを抱いていた．

異性に口の中を見せる羞恥心については，「とても恥ずかしい」160 名（45.8%），「やや恥ずかしい」142 名（40.7%），「あまり恥ずかしくない」31 名（8.9%），「まったく恥ずかしくない」16 名（4.6%）であった．「とても恥ずかしい」と「やや恥ずかしい」を合わせると 302 名（86.5%）が，恥ずかしい思いを抱いていた．

表2．口の中を見せることへの羞恥心

n ＝349

		人数（名）	割合（%）
とても恥ずかしい		101	28.9
	異性に限定	160	45.8
やや恥ずかしい		172	49.3
	異性に限定	142	40.7
あまり恥ずかしくない		45	12.9
	異性に限定	31	8.9
まったく恥ずかしくない		31	8.9
	異性に限定	16	4.6

3.5　口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心（表3）

口腔ケア演習時に異性と組むことについて，羞恥心の感じ方を質問し結果を得た．実際に演習において異性と組んだ経験がある学生や経験がない学生が存在した．本研究では，経験の有無による明確な学生数のデータを収集していない．羞恥心については，「とても恥ずかしい」183 名（52.4%），「やや恥ずかしい」134 名（38.4%），「あまり恥ずかしくない」21 名（6.0%），「まったく恥ずかしくない」11 名（3.2%）であった．「とても恥ずかしい」と「やや恥ずかしい」を合わせると 317 名（90.8%）が，恥ずかしい思いを抱いていた．

表3．口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心

n ＝349

	人数（名）	割合（%）
とても恥ずかしい	183	52.4
やや恥ずかしい	134	38.4
あまり恥ずかしくない	21	6
まったく恥ずかしくない	11	3.2

3.6　口腔ケアの羞恥心の比較

口腔ケアに対する羞恥心と影響要因の分析を行った．有意差を認めたのは，学年別で比較した「異性に口の中を見せることの羞恥心」，性別で比較した「口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心」であった．

学年別で比較した「異性に口の中を見せることの羞恥心」において，1 年生が中央値 4（3〜4）点，2 年生が中央値 3（3〜4）点，3 年生が中央値 3（3〜4）点，4 年生が中央値 3（3〜4）点であった．1 年生と 4 年生に有意差を認め，1 年生より 4 年生の方が，羞恥心が低い傾向があった（$p<0.01$）（効果量 0.79 ）（表 4）（図 3）（図 4）．

表4．異性に限定し口の中を見せる羞恥心の学年比較

n ＝349

	中央値（点）	4分位範囲（点）	p	効果量
1年生100名	4	3〜4	**	0.79
2年生91名	3	3〜4	（p=0.006）	
3年生94名	3	3〜4		
4年生64名	3	3〜4		

Kruskal-Wallis の検定後にScheffe法　** p <0.01

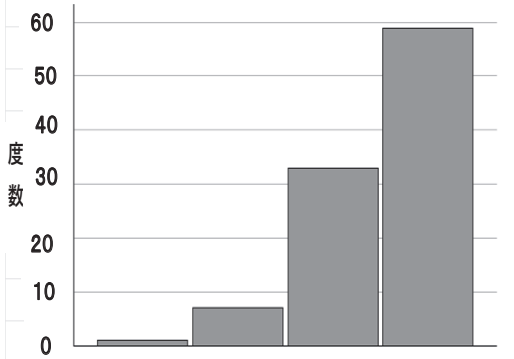


図3. ヒストグラム：1年生の異性に限定し口の中を見せる

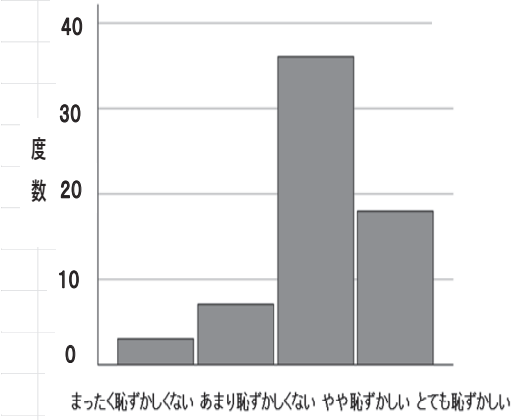


図4. ヒストグラム：4年生の異性に限定し口の中を見せる

性別で比較した「口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心」において，男性が中央値 3（3〜4）点，女性が中央値 4（3〜4）点で有意差を認めた（$p<0.01$）（効果量 0.16）（表 5）（図 5）．女性より男性の方が，羞恥心が低い傾向があった．その他，アルバイトの有

無，一人暮らしまたは家族と同居，学生が行う口腔のセルフケアにおける項目は，有意差を認めるデータがなかった.

表5. 口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心の性差

n＝349

	中央値(点)	4分位範囲(点)	p	効果量
男性28名	3	3～4	**	
女性321名	4	3～4		0.16

Mann-WhitneyのU検定 ** p<0.01

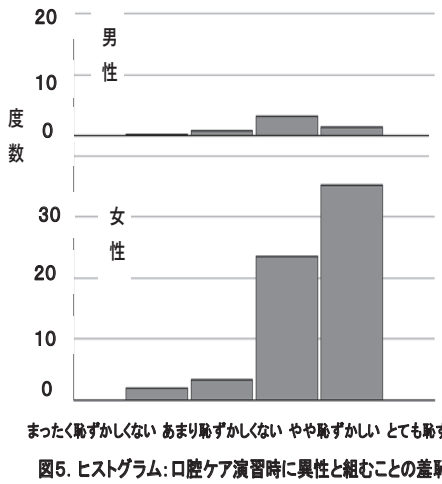


図5. ヒストグラム:口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心の性別

3.7　進路選択に対する自己効力感

進路選択に対する自己効力感尺度の合計得点の平均が，84.80±13.15 点であった（図 6）.

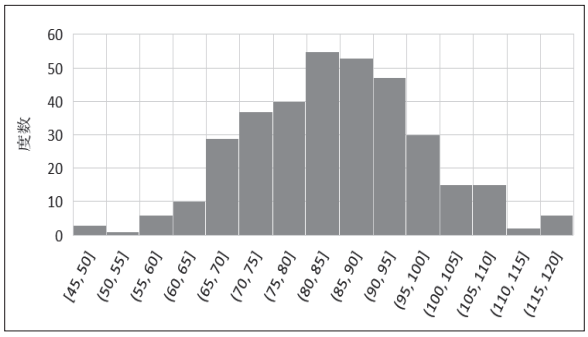


図6. 進路選択に対する自己効力感尺度の合計得点ヒストグラム

3.8　羞恥心と影響要因との関連（表 6）

影響要因の「進路選択に対する自己効力感尺度の合計得点」と「口を見せる羞恥心」に負の相関関係が認められた（p<0.01）. 進路選択に必要な行動がとれる自信がある学生は，口の中を見せる羞恥心が低い傾向があった.「異性に口を見せる羞恥心」と「演習時に異性と組むことの羞恥心」には，関連が認められなかった.

また，「口の中を見せる羞恥心」，「異性に口の中を見せる羞恥心」，「口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心」にそれぞれに相関関係を認めた（p<0.01）.

その他の影響要因である大学生活の楽しさ，友人の多さ（大学内，大学外）には，関連が認められなかった.

表6. 羞恥心と関連要因との関連

n＝349

	口の中を見せる羞恥心	異性に口の中を見せる羞恥心	演習を異性と組む羞恥心
口の中を見せる羞恥心	―	.769**	
異性に口の中を見せる羞恥心	―	―	.539**
演習を異性と組む羞恥心	.502**	―	―
大学生活の楽しさ	-0.086	-0.085	-0.073
学内友人の多さ	-.140**	-0.068	-0.020
学外友人の多さ	-.133*	-0.021	-0.050
進路選択の自己効力感	-.215**	-.141**	-0.084

Spearmanの順位相関係数の検定 * p<0.05 ** p<0.01

4. 考察

本研究では，口腔ケア演習において多くの学生が羞恥心を抱くことが明らかになった. 口腔ケアの演習時，「口の中を見せることの羞恥心」がある学生が 78.2%，「異性に見せることの羞恥心」を抱く学生が 86.5%に増えていた.「演習時に異性と組むことの羞恥心」は，さらに 90.8%と増える結果となったが，学生が異性と組む経験に基づく回答と想定に基づく回答が混在している可能性があった.「演習時に異性と組むことの羞恥心」は，経験に基づくか想定のものかによる違い，口の中を見せるだけでなく，どのようなことで羞恥心が強くなるのか今後の研究で明らかにする必要がある. これらに対して，早川らの研究[14]で患者が羞恥心を

抱くケアが排泄の援助とともに口腔ケアという結果があるように，学生も患者同様に口腔ケアに対して羞恥心を抱くと考えられた．口腔はデリケートゾーンであり，人に見せたり触れられることに羞恥心を抱きやすい場所である．口腔ケアの技術習得に向け，学生の羞恥心に配慮する必要性が示唆された．技術習得を目的とするなら，シミュレーターなどの使用や同性の学生で組むなど工夫が可能である．しかし，患者が抱く口腔ケアにおける羞恥心などを学ぶには，平岡らの研究[11]結果にあるように口腔ケア演習時に学生が患者役を行うことが有効であると考えられた．また，松尾らの研究[15]では，男性看護師を対象に看護基礎教育を振り返った思いや考えのデータ分析を行い，羞恥心が演習時に体験しないとわからないというデータを得ていた．さらに，異性に対する羞恥心などの学びが，女性の学生と組むことで得られるというデータもあった．清塚らの研究[16]では，女性の学生が男性患者を担当した場合の戸惑いや困難を感じた場面として，口腔の観察や嚥下訓練指導といった口腔ケアをあげていた．また，口腔ケアに限定したものでないが，井本[17]が手術を受ける女性患者に対して女性医療者による医療提供の工夫を行い羞恥心の軽減ができていた．看護師として性差による羞恥心の学びが必要であると考えられた．口腔ケアを受ける患者の羞恥心を学ぶことが目的であれば，口の中を見せることでまったく羞恥心を抱かない 8.9%の学生, 異性であってもまったく羞恥心を抱かない 4.6%の学生, 異性との組み合わせの演習で羞恥心を抱かない 3.2%の学生に対する教授方法を工夫する必要性が示唆された．

「口の中を見せることの羞恥心」，「異性に口の中を見せることの羞恥心」，「口腔ケア演習時に異性と組むことの羞恥心」は相関関係にあり，口の中を見せる羞恥心がある学生は，異性に口の中を見せる羞恥心や口腔ケア演習時に異性と組む羞恥心を持ちやすい傾向にあった．羞恥心の感じやすさには個人差があると考えられ，個人差を踏まえた教育が必要である．

本研究では，口腔ケア演習の羞恥心に影響する要因として，学年，性差，「進路選択に必要な行動がとれるという自信」が明らかになった．

影響要因の学年の差は, 1 年生より 4 年生の方が「異性に口の中を見せる羞恥心」が低くなっていた．このことについては，中島らの縦断研究[18]において，口腔ケアの学習意欲が 1 年生から 4 年生になると高まることから，羞恥心においても 1 年生から 4 年生で変化したことが推測された．今後，縦断研究で詳細を明らかにする必要がある．

影響要因の男女差は，男性の方が女性より「演習時に異性と組むことの羞恥心」が低くなっていたが，分析対象が男性 28 名 (8.0%) に対し女性 321 名 (92.0%) と男女の数が異なり，効果量 0.16 と低く今後の検証が必要である．鈴木ら[19]は，10～20 歳代の男女 327 名のデータ分析から，マスクを外す不安が男性より女性が強くなることを明らかにしていた．性差による心理的な違いを考慮する必要があると考えられた.

影響要因の「進路選択に必要な行動がとれるという自信」が「口の中を見せることの羞恥心」と負の相関関係にあり，影響要因として「進路選択の自信」の存在が明らかになった（表 6）．進路選択に自信がある方が，口の中を見せる羞恥心が低い傾向にあると考えられた．一方，羞恥心が強くて口腔ケア演習が苦手と感じ，進路選択の自己効力感が下がる可能性があり，配慮が必要であると考えられた．以上のことから，研究対象である看護系大学在籍の学生が，看護専門職となる進路選択に自信を持ち続ける教育が必要であると考えられた．先行研究を概観する中で，「進路選択の自信」と「口腔ケア演習の羞恥心」などの関係を扱った研究は見当たらなかった，「進路選択の自信」と「口腔ケア演習の羞恥心」という心理的関係を継続し研究する必要性が考えられた.

友人の多さは，口腔ケア演習に関する羞恥心との相関関係を認めなかった．友人が多く対人交流ができる学生であっても，口腔ケアの演習時の羞恥心と関連がないことが明らかになった．他方，大川内の研究[20]によれば，看護系大学 4 年生は，大学外の友人が多い方が「進路選択の自己効力感」が高い傾向にあり，本研究結果では「進路選択の自己効力感」が高い方が「口の中を見せることの羞恥心」が低くなる結果があった．2 つの研究結果から可能性として，学外の友人が増えることが「進路選択の自己効力感」を高め，口腔ケア演習時の羞恥心軽減につながることが推測された．大川内の研究[20]においては，口腔ケア演習時の羞恥心は検討されておらず，本研究においても，学外の友人数と「進路選択の自己効力感」との関連を明確していないことから，今後の研究課題である.

「アルバイト」という社会活動，「一人暮らしか家族との同居」といった生活の項目は，統計的検定の有意差を認めず，口腔ケア演習に関する羞恥心と関連を認めなかった．また，「大学生活を楽しむこと」につ

いても，口腔ケア演習に関する羞恥心と相関関係を認めなかった. 一方で, 中島ら[18]による縦断研究では, 口腔ケアに対する学習意欲を高めるには，大学生活が楽しめ，友人関係への支援が必要であることが示唆されている．本研究の横断研究では限界があり，４学年の学習状況が異なることから，今後の縦断研究が必要であると考えられた.

学生が行う口腔のセルフケアと口腔ケア演習に関する羞恥心は, 統計的検定の結果, 関連を認めなかった. 原ら[12]の研究でも１年生に限定したものであったが, 学生の口腔セルフケアと「口腔ケアに関する学習意欲」の関連がない結果を得ている．口腔セルフケアが学習意欲や羞恥心といった心理状態に影響しにくいと考えられた.

口腔ケアにおいては，基本的な技術習得に加え，臨床現場では口腔ケアの拒否が強い患者[21]や気管内挿管中の患者[22]など患者の身体的健康問題や心理状況に応じた対応が求められる．演習において，基本的口腔ケアの技術習得，羞恥心など心理面への配慮行動の習得が重要である．今後，研究結果を教育に活かすとともに，学生が抱く羞恥心と「口腔ケアの習得度」の関係及び患者の心理に関する理解度について，継続的な研究が必要であると考えられた.

5. 結論

本研究では，口腔ケアの演習時，多くの学生が羞恥心を持っていた．「口の中を見せることの羞恥心」78.2%であり，「異性に口の中を見せることの羞恥心」が 86.5%に増え，さらに「口腔ケアの演習を異性と組むことの羞恥心」が 90.8%と増える結果であった.

影響要因は, 学年, 性差, 進路選択の自信であった. 1 年生より 4 年生の方が，「異性に口の中を見せる羞恥心」が低かった．男性の学生が女性より「演習時に異性と組む羞恥心」が低くなっていたが，男女の数が異なり効果量が低く今後の検証が必要であった．進路選択に対する自信がある方が，「口の中を見せることの羞恥心」が低くなる傾向にあった.

【注記】

本研究における利益相反関係にある企業などはない.

本研究結果の一部は, 第 42 回日本看護科学学会　交流集会　演題名「看護学士課程における口腔ケア教育・研究の深化・発展を考える」において紹介した.

参考文献

[1] 厚生労働省：e-ヘルスネット（情報提供），歯・口腔の健康, https://kennet.mhlw.go.jp/information/information/teeth/h-03-006,（2025 年 10 月 24 日アクセス）.

[2] 厚生労働省：歯科口腔保健関連情報 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/shikakoukuuhoken/index.html,（2025 年 10 月 24 日アクセス）.

[3] 厚生労働省：政策，診療報酬改定，平成 28 年度診療報酬改定について, http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000106421.html,（2025 年 10 月 24 日アクセス）.

[4] 厚生労働省 : 政策，診療報酬改定，令和 6 年度診療報酬改定について, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188411_00045.html,（2025 年 10 月 24 日アクセス）.

[5] 日本老年歯科医師会：オーラルフレイルとは, https://www.gerodontology.jp/committee/002370.shtml,（2025 年 10 月 24 日アクセス）.

[6] 佐藤公子，平松喜美子，渡邉克俊 : オーラル・フレイルの早期発見によるフレイル予防　口腔機能低下が地域在住高齢者の栄養状態に及ぼす影響の検討，日本未病システム学会雑誌，25(3), pp.11-19, 2019.

[7] 鳥内陽子，荻野進 : 精神科における誤嚥性肺炎予防への取り組み　嚥下機能訓練を通して, 日本精神科看護学術集会誌，58(1), pp.118-119, 2015.

[8] Claar D van der Maarel-Wierink, Jackie NO-Vanobbergen, Ewald M Bronkhorst, Jos M G A Schols, Cees de Baat: Oral health care and aspi-ration pneumonia in frail older people:a systematic literature review, Gerodontology 30, pp.3-9, 2013.

[9] 博多研文，川又均，今井裕 : 感染性心内膜炎発症における口腔内細菌の関与, Dokkyo Journal of Medical Sciences, 41(1), pp.103-113, 2014.

[10] 文部科学省：看護学教育モデル・コア・カリキュラム関連,

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/iryou/mext_00021.html，（2025 年 10 月 24 日アクセス）．
[11] 平岡葉子，北村直子，古川直美，奥村美奈子：口腔ケア体験型学習による学生の学び，岐阜県立看護大学紀要，9(2), pp.11-17, 2009.
[12] 原やよい，中島富有子，窪田惠子：看護学生の 1 年次における「口腔ケアに関する学習意欲」の影響要因 : 日本健康医学会雑誌, 27(1), pp.55-61, 2018.
[13] 浦上昌則 : 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究, 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理編), 42, pp.115-126, 1995.
[14] 早川真奈美，古田雅俊，中村恵子，加納一二三：看護実習生の受け持ちに関する患者の意識調査，日本看護学会論文集: 看護教育，47, pp.131-134, 2017.
[15] 松尾恭子，小松智：性差を踏まえて考える羞恥心を伴うケアに対する看護基礎教育内容の課題　男性看護師の振り返りを通して，日本看護学会論文集 看護教育，43, pp.94-97, 2013.
[16] 清塚遊，長谷川真美，桑原直弥：女子看護学生が性別の異なる患者を受け持った時に感じた戸惑い，東都医療大学紀要，7(1), pp.9-17, 2017.
[17] 井本有美：手術をうける患者の羞恥心について，川崎市立川崎病院事例研究集録, 19, pp.59-61, 2017.
[18] 中島富有子，原やよい，窪田惠子，大川内鉄二：看護学生の口腔ケアに対する学習意欲　1 年次と 4 年次の比較，バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌，23(2), pp.53-58, 2021.
[19] 鈴木公啓，矢澤美香子：脱マスク不安と外見意識身体醜形懸念と身体外見羞恥心を用いた検討，ストレス科学研究，38, pp.73-77, 2025.
[20] 大川内鉄二，中島富有子，原やよい，窪田惠子：看護大学 4 年生が持つ「進路選択の自己効力感」とその影響要因，バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌，24(1), pp.7-12, 2022.
[21] 倉重幸代：認知症患者の歯磨き援助困難事例から口腔ケアプロトコールの改善のための一考察，日本精神科看護学術集会誌，66(1), pp.122-123, 2023.
[22] 田戸朝美，立野淳子，山勢博彰：気管挿管患者への口腔ケアのマニュアル改訂とICU看護師に対する教育動画による効果，日本クリティカルケア看護学会誌，19, pp.99-106, 2023.



中島富有子（なかしま ふゆこ）
西九州大学　看護学部
教授
博士（臨床心理学）
バイオメディカル・ファジィ・システム学会会員



原やよい（はら やよい）
福岡看護大学　看護学部
准教授
博士（人間環境科学）



大川内鉄二（おおかわち てつじ）
西九州大学　看護学部
講師
博士（医学）



高野佳範（こうの よしのり）
西九州大学　看護学部
助教
修士（看護学）



黒木まどか（くろき　まどか）
福岡医療短期大学
歯科衛生学科
准教授
博士（人間環境科学）